

2014. 7. 3 (木)

『自由』をめぐって

内田 充美

突然つながることば

おはようございます、内田です。今日は、ふだんあまり意識を向けてみないようなこと、言い換えると、わざとではないけれど棚上げになっていること、について考えてみようと思います。たとえば、ある時、ある場面で、人に言われたこと、よくわからないまま、なんとなく、棚上げにしている出来事や場面というのがあるのではないのでしょうか。

幼稚園のころ、よく親に連れられておじゃましたあの家はいったいどこのお宅だったんだろう、とか。毎日学校へ通う道筋にあった工場では、金属くすのようなものがたくさん出ている工場があったり、いつも蒸気が吹き出している工場があったり。あれはいったい何を作っていた、どういう会社の工場だったんだろう、とか。その当時は、完全に日常の一部になっていて、まるで空気のようなものだったので、なにも疑問を感じない、わざわざ考えることはしない、そして、いったん自分の日常生活から消えてしまうと、つまり、引越をしたり、生活スタイルかが変わって通学路が変わったり、とかいうことですが、もう、考えてみることはしない、と、そういうことがたくさんありますよね？

わたしの場合は、今はことばの研究をしていることもあって、ことばや表現が、棚上げになっていて、ふだんは考える余裕がないのだけれど、突然気になり始める、とか、たまたま関連することに意識が向いて、なにかの拍子に、なんだそうだったのか、と納得する、ということがときどきあります。忘れればなしのことも多いのですが、最近では、会社員をしていたころに愛用していた手帳のブランド「クオヴァディス」、意味を考えてみることもなく、ただ、使いやすい手帳の名前とっていましたが、ラテン語の勉強を始めて、かつ、そこで知り合った人がクリスチャンで、ある日、はっとつながりました。聖書の言葉だったんです。むかし近所にあった店の名前で「ポポロ」、これも定期的にイタリア人の知り合いと話すようになって、「なんだ、ピープルや」とつながりました。

「自由と創造」

さて、チャペルの月間共通テーマは「自由」をめぐって。言うまでもなく、社会学部の校舎に掲げられた「真理はあなたがたを自由にする」という言葉にちなんだテーマです。このテーマを課題としていただいてから、ひとつ、わたしにとって、長い間棚上げ

になっていた表現が、頭と心の中に戻ってきました。

わたしは大阪市のある公立高校に通っていたのですが、そのこのスクールモットーが、「自由と創造」というものです。このなかにも、同じ高校の卒業生の人がいるかもしれませんね。今のこの高校の校風がどうなっているのかはあまり知りませんが、わたしが在学しているところは、本当に自由でした。先生はほとんど授業をしてテストをして成績を出すだけという感じで、生活指導も、進路指導も、ありませんでした。受験のことも、生徒同士で情報を交換し合って、なんとなく、志望校を決めたり、今でいうセンター試験の願書も、自分で取り寄せたりしていました。

授業を抜け出して喫茶店に行くことや、放課後ミナミの街に繰り出すことも自由、制服などありませんから、当時はものすごく高価だったブランドのダウンジャケットを着ていたり、夏にはタンクトップで来る女子がいたり、ピンヒールをはいていたたり、マニキュアのせいで化学の実験ができないとか、ブランドのバッグを持ってフルメイクで登校してくる生徒もいましたが、そういった多様性も、その人その人の個性として、ごくふつうに受け容れられていました。

文化祭のことを記念祭と呼ぶのですが、その記念祭の準備や、体育祭の準備のためには学校に泊まり込むこともありましたが、担任や顧問が立ち会うわけでもなく、書類を提出するといった手続きも不要だったと思います。体育祭では、クラス対抗で仮装コンテストのようなことをするのですが、運動競技を行うトラックやフィールドの上を、衣装であるハイヒールで歩き回って地面をボコボコにしたり、短距離走で「よーいスタート」とい

う合図に合わせて、くると反対を向いて、トラックを逆走し始める生徒がいたりもしました。もっともっとよくないこと、あまり口にできないようなことも、行われていたんだと思います。今考えると、自由というよりは、放任だというほうが当たっているでしょう。今思うと恥ずかしいことがたくさんあります。

生徒を代表する会も、生徒会という名前ではなくて自治会という名前でした。先生たちも、おおむね、そういう校風を大事にしていたように思います。いっぽう、定期試験の成績が悪ければ留年、留年が重なれば退学、と、こちらもいっさい容赦はありませんでした。

2年生の時の担任がホームルームで、ある日、心底、あきれた顔で「あなたたちは、自由を主張するばかりだ」と言ったことがありました。この言葉が、わたしの頭と気持ちの中で棚上げになっていたのです。「自由と創造」このふたつの名詞からなるスクールモットーはなんだったんでしょう。

言語学の方法で

言語学の方法には、さまざまなアプローチがありますが、わたしの専門はコーパス言語学といって、データをじっくり見る、という学問の方法をとります。研究テーマである表現を定めたら、その言葉が実際に、どのように用いられているのか、を、観察します。これは、ちょうど動物や植物を研究する人が、その生物が生きている環境を調べるのと同じです。地道にその環境を観察していくことで、その生物の性質、特徴が明らかになる、そういう手法を用います。

なかでも、データを用いる言語学の場合、コロケーションとって、ある語が別のどのような語と一しょに使われることが多いのかということが大切なポイントとなります。語と語との結びつきとっていいと思えます。たとえば形容詞だったら、「ゆゆしき」という形容詞はほとんど「事態」という名詞としか一緒に現れませんし、「ハンサムな」という表現は、日本語では、ほぼ、男性を指す名詞とともにもちいられます。逆に、「自由」という単語が「天ぶら」という単語と一しょに用いられることはあまりない、これらの語の結びつきはあまり強くない、というふうに言えます。

それで、問題は、スクールモットーである「自由と創造」です。この2つの言葉の結びつきが、わたしにとってはあまりしっくり来ない、という、モヤモヤした問題意識がずっとありました。なんとなく気持ちの悪いまま、2年生の担任の「あんたたちは自由ばかり主張する」という言葉と一しょに、意識の中で棚上げになっていたわけです。今回、いい機会だからということで、日本語データベースを用いて調査を行ってみました。国立国語研究所が公開している書籍のデータベースで「自由と」という言葉のあとにどうい言葉が続いて用いられることが多いのか、を調べてみました。

いちばん多いのは「自由と平等」です。2位が、「自由と民主主義、民主」3位が「自由と正義」、そのあと「自由と独立」「自由と自立」「自由と解放」と、続きます。自由と平等、自由と民主主義、自由と正義、自由と独立、自由と自立、自由と解放…なるほど、これらのコロケーションなら、すんなりと理解できる、自然な表現だというふうに感じま

す。よけいなことですが、英語のデータベースでも Freedom と一緒に現れる語を調べると、上位は同じような意味の単語になります。

これらに共通しているのは、個人の感じ方というよりは、社会や制度のありようを論じている文脈に現れている、という点です。これらの表現が含まれている書籍は社会科学や哲学の分野のものがほとんどですし、自由と正義、については、日本弁護士連合会の機関誌の名前として現れているケースがかなりあります。

一方、数はとても少なくなりますが、個人の心の動きを追って描写するような小説やエッセイでは、次のようなコロケーションが見られます。おいしいパン屋さんの話で「なんとたくさんの自由と時間を私から奪ったことであろうか」という文脈での「自由と時間」、日課をこなすことは自由と幸福を得ることだ」という文脈での「自由と幸福」。 「自由とやすらぎ」というのもあります。

当時高校生だったわたしたちが、日々実感し、調子にのって悪用していたのは、この、後者の用法が表すような、個人の感じ方としての「自由」だったように思います。社会、社会の仕組みの不正さに対する疑問や怒りをはらんだ「自由」というよりは、むしろ、気楽で、思い通り、好き勝手という「自由」です。

スクールモットーである「自由と創造」については、やはり、この日本語データベースでは、「自由と創造」という組み合わせ、コロケーションは発見できませんでした。唯一「創造性」はありました。これは武道の本で、いわゆるカタを演じることで、その制限されたかたちの中にこそ、自由と創造性が生まれ

てくるのだ、という文脈です。また、教育関連の書籍では、学習者（こども）にあれこれと指図するのではなく、介入しないほうがいいのか、というような文脈で、「自由と強制」という表現がありました。

ここまで調べたところで、わたしの疑問は解消されたように思いました。なるほど、だから先生たちは、服装指導もしないし、生活指導も進路指導もしないし、生徒の「自治」にまかせていた。スクールモットーの「自由と創造」は、日常の中で、生徒への指示や介入をしないことで生徒の学習、創造性を活性化させようという、教育方針の現れだったのだ、と。

スクールモットーの歴史

いつもの研究調査と同じように、「自由と」という表現についての調査を終えようとしたときに、目に飛び込んできたのが、高校の同窓会報に掲載された記事の一部でした。平成9年2月10日発行のものより引用します。一部個人名は伏せます。「初代の校長が第一回卒業式で訓示された「自由と創造」の立派な校是も昭和になると、教師、生徒の間から消え、二代目校長は、「日新日進」の中国の古典からの校是を我々在校生に示された。昭和十年入学、十五年卒業の私の記憶である。自由の文字は、当時の教育界では禁句であったのではなからうか。」

社会の流れのなかで、学校という場で「自由」ということばが禁句とされた時期。戦争に向かって国民全体が鼓舞され、突き進んでいくような状況で、学校での理想として「自由」を口にすることがゆるされない時代があったということです。わが高校といえ

「自由と創造」、ずっとあたりまえのように受け止めてきたスクールモットーの歴史の中には、それを隠さなければいけない時期があったという事実は、わたしにとって衝撃でした。このことは、日常レベルで、個人が感じる解放感としての自由、介入されない、指図されない「自由」の基盤には、まさに、社会科学や哲学で論じられるところの「自由」が不可欠である、ということを表していると思います。

2年生の時の担任は、そういった大事なことを意識することもなく、ただただ表面的な自由を謳歌して、調子にのってはしゃぎ、勝手なことをする生徒たちに、その基盤となっている「自由」の意味もすこしは考えろよ、と言いたかったのかもかもしれません。誰も耳をかさないことはわかっていたのでしょう。だから、ひっかかりのある表現で、生徒の記憶に謎の種を仕込んでおいたのだと思います。

未来形の「自由」

さて、関学社会学部のほうに話を戻すと、「真理はあなたがたを自由にする」。「真理」ということばと「自由」という言葉は、ここでは、何を意味しているのでしょうか。聖書のこの部分は、いろいろな言語のバージョンを見ると、自由にする、の部分、言語によっては、解放する、に近い意味で訳されることもあれば、自由を得させる、という表現で訳されることもあるようです。また、もとのラテン語では、この動詞は未来形になっていて、英語版でも will や shall が入っています。ここには、どういう前提が隠れているのでしょうか。

この文の意味については、聖書学の世界で

の議論もいろいろあるでしょうし、キリスト教から離れた文脈で、もっと広い意味で解釈することも可能でしょう。社会学部のみなさんには、今すぐに、これについて考えてみてはどうですか、と提案してみてもあまり興味がないでしょう。

今は、まず、忙しいでしょうから、棚上げにしておいてもかまわないので、何年後か、何十年後でも、その時の自分の視点で、それぞれの立場で、もういちど、この言葉の意味について考えてみる日がくればいいな、と、

思います。また、その時の自分だから気付くことのできる新たな意味に出会うことができるといいな、というふうに、願っています。また、そのころのわれわれが、あるいはみなさんが、生きている時代が、「自由」について自由な思考をめぐらせ、それを公然と口にすることができる状況であるよう、一緒に努力をしていかなければいけないと思っています。

(社会学部教授)